

第一輯 リスボン大地震の総覧と諸相

論文一ノ二

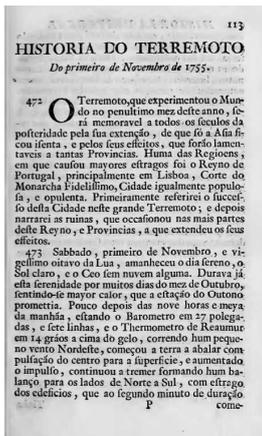
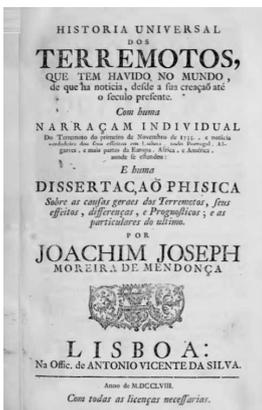
リスボン大地震の総覧と

モレイラ・デ・メンドンサ著 『世界地震通史』

『世界地震通史』はみずから被災と救援を体験したモレイラ・デ・メンドンサによって

一七五八年に公刊された。古代からの地震略史と自然科学的な地震理論の略述をも含むが、

同書の主要部分はリスボン大地震の詳細であり、総合的な基本史料として高く評価される。



第一節 巨大地震の発生と大津波の襲来

1 『世界地震通史』第四七二項から第四八四項まで

王都リスボン、大地震の直撃、大津波の襲来、ポルトガル人の信仰、民衆の罹災と避難、サン・ジョルジェ城とオラトリオ会修道院の衝撃、リスボン港埠頭の惨劇、モレイラ・デ・メンドンサと『世界地震通史』

第二節 住民の艱苦と相互の扶助

1 『世界地震通史』第四八五項から第五〇七項まで

神の怒りと審判、民衆の畏怖と祈祷、火災の発生、犯罪の頻発、王室の避難、緊急措置の発令、『ヨハネ黙示録』、王宮広場の凄惨、貴族による救護、造幣局の防禦、聖職者の献身

第三節 大火の席捲、殿閣・邸宅の焼尽、教会・蔵書の被災

1 『世界地震通史』第五〇五項から第五二九項まで

大火の規模と範囲、教会と殿閣と王宮の炎上、王都中心部の絵図、蔵書と図書館の焼失、エルセイラ伯爵の蔵書、教会と殿閣の壊滅、サン・ヴィセンテ・フォラ大寺院の倒壊、財富の喪失と経済的損失

第四節 人的・物的被害の全容、緊急政策と救援活動

1 『世界地震通史』第五三〇項から第五五七項まで

震災による死亡数、死者の内訳、破壊された建物、消失した財富、罹災への緊急政策、食糧確保の措置、リスボン復興の改革と実現、災害への危機管理、王権と教権による祈祷行列

第一節 巨大地震の発生と大津波の襲来

― 『世界地震通史』 第四七二項から第四八四項まで

王都リスボン、大地震の直撃、大津波の襲来、ポルトガル人の信仰、民衆の罹災と避難、サン・ジョルジェ城での衝撃、オラトリオ会修道院の被災、リスボン港埠頭の惨劇、メンドンサと『世界地震通史』

一七五五年十一月一日万聖節の午前、栄華を極める港都市リスボンで巨大地震が発生した。モレイラ・デ・メンドンサ著『世界地震通史―リスボン大地震』は、この震災に関するもつとも基本的な文献である。みづから身辺の被災と救出の活動を体験し、ポルトガル古文書館の要職にあつた彼は、地震発生の三年後に全巻三百頁、六百項にも及ぶ『世界地震通史』を刊行した。

リスボン大地震に関する主要な文献として筆頭に挙げられる『世界地震通史―リスボン大地震』(Historia Universal dos Terremotos, que tem havido no Mundo)は地震発生の四年後、一七五八年に公刊された。著者ジョアキム・ジョゼフ・モレイラ・デ・メンドンサは、ポルトガル古文書館の要職にあり、みづから大地震・大火・大津波を体験した。全巻三百頁、六百項に及ぶ『世界地震通史』では、ここでは執筆者としての序言と官憲の出版許可書のあと、三つの部門にわたり多角的な本論が展開される。その第一は世界における地震の歴史、

第二はリスボン大地震の委細、第三は地震に関する古今の学説であるが、中核をなすのはもとより第二の部門、いわば第二部にあたる震災記録である。この古典的著作は以下に邦訳することく長大な書名であるため、本稿では便宜上『世界地震通史―リスボン大地震』または『世界地震通史』の略称を用いる。

ジョアキム・ジョゼフ・モレイラ・ド・メンドンサ著『万物の創造から今次の世紀に至る世界地震通史―とくにリスボン、ポルトガル全土、アルガルヴェ、およびヨーロッパ、アフリカ、アメリカの多数の地域を震撼した一七五五年十一月一日の地震に関する個別の記録、ならびにその地震の原因、結果、差異、予測に関する自然学的論究』①

リスボン大地震二百年を際して、これを綿密かつ多面的に考察し、先駆的な役割を果たしたトーマス・ケン

① 原典の表紙に誌された本来の書名とその試訳を左記に掲げる。

JOACHIM JOSEPH MOREIRA DE MENDONÇA, HISTORIA UNIVERSAL DOS TERREMOTOS, QUE TEM HAVIDO NO MUNDO, de que ha noticia, desde a sua creação até o seculo presente. Com huma NARRAÇAM INDIVIDUAL Do Terremoto do primeiro de Novembro de 1755. e noticia verdadeira dos seus effeitos em Lisboa, todo Portugal Algarve, e mais partes da Europa, Africa, e America, aonde se estendeu : E huma DISSERTAÇÃO AO PHISICA sobre as causas geraras dos Terremotos, seus effeitos, differenças, e Porognoticos : e as particulares do ultimo.

ドリックは、『世界地震通史―リスボン大地震』をつぎのように評価する。これこそ「もっとも優れた同時代の証言、際立って価値ある書物であり、巨大地震についてなされたあらゆる研究を凌駕する。」①
本稿においてはこうした『世界地震通史』の史料的価値鑑み、同書の第二部全文を試訳して、それらを別立てとして順次に組み入れる。さて、第一部で有史以来の地震発生を年代記的に検証したモレイラ・デ・メンドンサは、いよいよ一七五五年のリスボンに到り、ヨーロッパ最大の地震勃発について語り始める。

地震の歴史 一七五五年十一月一日

【第四七二項】 この年十一月に人類が体験した地震は、規模の大きさによって後世のあらゆる世紀に想起されるであろう。なぜなら、その影響は遺憾にもきわめて多くの地域に及び、アジアのみが免れたからである。甚大な被害を蒙った地域の第一はポルトガル王国、とくに国王陛下の王宮を擁し、殷富で人口稠密な都市リスボンである。最初にこの都会における大地震の結果を報告し、さらには王国の各地や連関する諸地域についてその影響を叙述したい。

【第四七三項】 十一月一日、月曆二八日、大気は静穏で、雲はなく快晴。十月から温暖な数日が続き、秋としては多少暑さを感じた。気圧計二七インチセライン、レオミュール温度計一四グラオ、北東の微風。午前九時半をすこし過ぎた頃、大地が揺れ始めた。その震動は地底から地面へ突き上げ、衝撃を増しなが

① Thomas Downing Kendrick. *The Lisbon Earthquake*. New York, 1955. p.247.

ら、北から南へ揺さぶるように続いた。これに伴って建物の被害が生じ、数分のうちに倒壊と壊滅が始まり、大地の激烈な震動とその持続に人々は抵抗できなかった。第二の震動は一層規則的に七分か八分続き、短い中断を挟んで二度の地震が起った。あたかも遠くで雷が鳴るときのように、地下の雷鳴ともいいうべき轟きが、この時間に終始聞えた。猛烈な速度で走る馬車のように多くの人々は思った。まさしく大地から噴出する蒸気によって、太陽の光が多少とも暗くなり、そこに含まれる硫黄の成分から臭気が発散するよう感じられた。大地のあちこちに幅広くはないが、延々たる亀裂が認められた。建物の壊滅によって発生した粉塵が王都の一带を濃い霧で覆い、あらゆる生きものを窒息させた。①

一九三六年に刊行されたチャールズ・ダヴィソンの著作『大地震』は一八世紀以降の震災十六を解明した労作であるが、その第一章をリスボン大地震の分析に当てている。ダヴィソンの考証によれば、当日の地震は三次にわたり、最初の衝撃は午前九時四十分頃であった。「第一次の震動は早くはあるが、微細な揺れで始まり、警戒もさせないまま約一分続いた。そのあと三十秒ほどの間隔を置いて、急速で激烈な震動が発生し、家々が崩れ始めた。二分有余続いたであろう。さらに一分たらず止ったのち、異なった性質の震動、乗物を岩場に突

① Moreira de Mendonça, *op. cit.*, pp. 113-114.

なお、気圧計二七インチセライン、レオミュール温度計一四グラオは気圧計約二三八ヘクトパスカル、温度計撰氏一七・五度に相当する。

き上げるような震動が襲いかかった。この局面が二分から三分続いて、リスボンの住宅、教会、公共建造物が壊滅し、数千人の生命が奪われた。」引き続き震動については明確な証言が乏しく、ダヴィソンは第二は九時五十分から十時四十分までの間、第三は正午頃と推測している。①

「震動記録が欠如するために」と「基礎地震学」においてリヒターは論述する。「マグニチュードをおおまかにしか適用できないが、すでに私たちがマグニチュードを明確した土地とリスボン地震の発生地とを対比すれば、結論が得られる。任意の地点、たとえばリスボンの西約千キロを震央として選び、災害の外周を平均六百キロの距離、人体に感じられる外周を平均二千キロの距離、また水面の震動（セイシュ）を生じる外周を平均三千五百キロの距離と確認できる。これと一八九七年インド地震を対比して、いずれの衝撃もほぼ等しく強烈であるとオルドハムは結論した。リスボン地震のマグニチュードはおそらく八・五以下ではなく、八・七五に近いと思われる。」リヒターによって確立された震度の測定、いわゆるリヒター・スケールを適用すれば、リヒターによれば、一九〇六年のカルフォルニア大地震と一九二三年の関東大地震はともにマグニチュード八・三であり、一八九七年のインド（アッサム）地震がリスボン大地震とほぼ同じ強度とされる。② 二〇一一年東日本大震災のマグニチュード九と二〇〇四年のスマトラ島沖地震・津波がほぼ同じ規模である。ちなみに計測された史上最大の揺れはマグニチュード九・五の一九六〇年チリ地震である。

① Charles Davison, *Great Earthquakes*, London, 1936, pp. 9-10.

② Richter, *op.cit.* p. 105.

ポルトガルの首都リスボンは北緯三八度四六分西経九度九分、ヨーロッパ大陸の西南端に位置し、宮城県の上巻や女川とほぼ同じ緯度にある。マドリッドの東方ウニヴェルサレス山地に発する大河テージョは、イベイア半島を横断し、西南部で三角江をなして大西洋に注ぐ。リスボンは北岸の緩やかな斜面に築かれ、河口からの距離は約十キロ、縦六・五キロ横二・五キロの流域を占めた。十八世紀のポルトガルは本土の面積において現在と大差はなく、短冊形の国土は東北地方に北関東を加えた広さに近い。その西側の山岳部はスペインとの国境を画し、大西洋を望む東側の海岸線は、鹿島灘から三陸海岸に至る長い沿岸部を連想させる。

【第四七四項】 こうした大地の揺れによって海水が背進し、岸辺では初めて見る海底も露出した。また、そそり立つ丘陵をも洗い、尽きることのない震動が、沿岸のあらゆる民族へ影響を及ぼした。氾濫は大きなもの三度、小さなもの数度にわたり、多数の建物と水辺の多くの住民を破滅させた。

【第四七五項】 このような光景が悲痛な記憶を私に甦えらせる。多くの悲惨な事実が念頭に浮かび、それらの膨大さ、多様さ、深刻さは仔細に語るのを私に躊躇させる。だが、災厄の一端を話すだけでも、巨大な全貌を知る手掛りになるかもしれない。①

① Moreira de Mendonça, *op. cit.*, p. 114.

「その古事と雄大さによって、」と大地震の五年前イギリスで刊行された『スペイン・ポルトガル周遊』において著者ウダール・ライスは誌している。「さらには建築の美しさ、都邑の広壮さ、財富の豊かさ、港湾の素晴らしさによってリスボンは傑出してゐる。また、ここは総大司教の管轄区ならびに王国の首都でもある。」ギリシャ神話の英雄ユリウス（ユリシーズ）に由来するこの港湾都市も、ヨーロッパ諸国の人々にとつてはフィレンチェやパリほど心惹かれる景勝ではなかつた。そうした通念をこの旅行案内書は一新したと言われる。リスボンとテージョ河の景観についても彼はつぎのように描写する。「この都市は七つの丘のうえに造営された。いくつかの丘陵がとくに屹立し、ほかの丘もあるいは繋がりが、あるいは対峙して、多彩な丘陵と溪谷が美事に形成されている。したがつて、テージョ河の向岸から眺めると、壮大な円形劇場のように映じ、絶妙な地形による類稀れな景観、壮大な建築に籠められ千状万態の魅力をすべて感じさせる。市内の高みから俯瞰しても、魅力的な国土の眺望が得られる。美しい国土に加えてテージョ河に万国の船舶が雲集する情景ほど、素晴らしい絵図があるだろうか。」①

メキシコ海流の偏西風を受けて、四季を通じて温暖であり、冬には避寒や療養のため滞在する外国人も見られる。ライスはポルトガルの風土と気候をも推奨する。「ここでは大気がとりわけ温和、天空もとりわけ晴朗であつて、つねに快適に過ごせる。良質の飲み水とも相まって住民をきわめて壮健にするため、他の風土とは異なつて、疾患に苦しむことも、新しい病気に罹かることもなく、彼らは幸福にも非常な高齢にまで存命する。」

① Udal ap Rhys, *A Tour through Spain and Portugal*, London, 1750, pp. 265, 271-272.

かくも温暖であるから、冬にさえここでは薔薇や他の草花が眺められる。」① そうした爽快な秋の午前、未曾有の大地震と大津波がリスボンを直撃した。

【第四七六項】 おりしも万聖節の祭日として盛儀が予定され、その時刻にはあまたの人々が教会へ参集し、聖職者の説教に恭しく聴き入るか、当日の式典を待ち受けていた。同じ目的で寺院をめざしたり、用務を果たすため、道を急ぐ人々もかなり見られた。王都の住民の大半は自宅にいて、人によつてはまだ床を離れない。地震を感じるや、すべてが脅威、混乱、無秩序となつた。②

罹災者の恐怖と艱苦を倍加させたのは、キリスト教の重要な盛儀に地震が発生したことである。ポルトガルはイタリア、フランス、スペインとともに有力なカトリック教国であり、とりわけ信心深い民族として知られていた。一八世紀中葉リスボンには四十の教区教会をはじめ、若干の非教区教会、一二一の礼拝堂、九十の修道院、さらには一五〇の宗教団体があつた。イギリスの神父ジョージ・ホワイトフィールドは一七五四年ポルトガルに滞在し、当地の宗教と習俗について貴重な証言を綴っている。「もつとも目立つのは、十字架像をはじめ聖母マリアや名高い聖者の像が溢れることで、それらはどの道路に傍らや街角の家扉でも燈明に照らされ、置

① Rhys, *op.cit.*, p. 272.

② Moreira de Mendonça, *op. cit.*, p. 115.

かれています。通り過ぎる男女はそれらに礼拝し、一団の人々が熱烈に唱和するのも見かけました。」宗教的な関心から彼はこうした習俗に注目し、以後も緻密な観察を続ける。投宿してまもなく「窓から外を眺めていると、点火した蠟燭を持ち、多彩な信者を従えた聖職者や修道士の群れが現れました。一方では穀物を袋や籠に容れて携え、他方ではふたりずつ天秤で食糧を背負っています。そのあとにも大勢の善男善女が続いて、朗々と合唱し、〈神よ、恵み給え！〉と聖母マリアにかならず祈ります。こうした様相で彼らは牢獄へと行進し、運搬したすべてを哀れな囚人に供するのです。」クエーカー教徒の牧師によって綴られ、同じ宗派の友人に宛てたこの手紙には長い標題、『リスボンで昨年目撃した大齋節、異様な祈禱行列、教会の行事に関する簡潔な報告、イギリスの友に宛てた四つの書簡』が付せられている。①

万聖節は降誕節、復活節、大齋節などと同じくカトリックの重要な祝日であり、この日は数多くの聖者に盛儀が捧げられる。前夜から街々で祭りが始まり、リスボンではとくに王都の守護聖人、聖者アントニオが崇敬を集めた。一七三〇年パリで出版された著者不詳の『都市リスボン細叙』にはつぎのような記述が見出される。

「男も女も聖者ブノワを深く信仰し、その聖遺物が大きな教会、ポルトガル語で彼の名を付したサン・ベント教会に安置される。三月二二日はこの聖者の祝日であって、教会の門前に蟻集する民衆が、パンに事欠かない

① George Whitefield, *A brief account of some Lent and other extraordinary processions and ecclesiastical entertainments seen last year at Lisbon. in four letters to an english friend.* London, 1755. pp. 2-3.

ようにと祈願する。そして、どの金曜日にも娘たちはよき配偶者と結ばれるようミサで祈る。」また、老人や病人は聖者ゴンカロをとくに信仰し、ロッシオ広場のドミニカ会修道院に祀っている。祭日に彼らはそこで祈禱とともに踊りと聖歌を捧げる。聖者のとりなしで治癒するために、彼を讃えて踊ることが必要なのである。「ダヴィッド王が拱門の前で踊り、楽器を奏したと旧約聖書に書かれていることが、こうした祭事の根拠である。」

① 【第四七七項】 ある人たちは屋内で茫然として地を踏むことも、戸を叩くこともできず、他の人たちは街路に跳び出して、障壁の瓦解によって死んだ。街路から教会へ避難する者もあり、降りかかる危険を避けるため教会から逃れる者もいた。住居の倒塌によって多数が石材の下敷となって絶命し、瓦礫に生き埋めにされ、救助を求めて泣き叫ぶ者もあった。

【第四七八項】 破壊された多くの寺院、階梯、穹窿、障壁が群衆の頭上に落下し、逃げ惑う彼らは神の慈悲を求めた。そうした叫びは聖母マリアの加護を願ってもなされる。同じ叫喚は王都のあらゆる街路や地点、近郊のさまざまな地区で聞かれた。地震の脅威、建物倒塌の轟音、死への恐怖、男衆の嘆き、女子供の泣き声が異常な喧噪と錯乱を惹き起し、全般的な錯乱によって危機に対応できぬ状況となった。②

① Anonym, *Description de la ville de Lisbonne*, pp. 120-122.

② Moreira de Mendonça, *op. cit.*, p. 115.

オラトリオ会の神父マノエル・ポルタルは王宮の北西、ノヴァ・アルメダ街にの修道院で地震に襲われた。聖母マリアから不興の御意を告げられる夢に、万聖節の前夜苦しんだポルタルは、陰鬱な気持で翌朝祝日の聖儀に列席し、ついで小人数で祈祷すべく僧坊に戻った。「ミサのあと小部屋でしばし寛いだことを想起します。ジョアン・バリボサ神父が来られてまもなく、新しい回廊に沿う小部屋の床板が揺れ始めます。床板が軋るのを気にした私は、すぐに地震だと感じ、神父について庭園の方へ急遽駆けました。」門を越えようとした神父は、横転する木箱と作業台の間に倒される。「自分の頭上で回廊の屋根が崩れ、礼拝堂の上に倒壊したのです。ディオゴ・ヴェルネイ神父は向側の回廊で身を支えていました。身体は埋れましたが、石などは落下せず、頭の痛みもあります。地震は七分間続き、死の接近を刻々と感じながら、鎮まるまで神に慈悲を求め続けます。震動が止んでも、身動きができず、慄然として大声で救助を求めました。神の御心によって窓口から脱出できた方々、フランシスコ・ダ・カルバロ副修道院長、ホウチスモ修道士、アントニオ・ゴンサルヴェ修道士、さらにはジョアン・バリボサ神父と商人マヌエル・ゴンサルヴェが、みな大いなる博愛を發揮され、私を救出されたのです。脚の上を岩石が塞いで、持ち上げるのに人手を要し、私の衣服も破れました。幸運にも救い出され

たものの、脚は腫れ、目は血に染って、深い傷のまま庭園の方へ這い上ったのです。」①

イギリスのクエーカー派牧師リチャード・ゴダールは療養のためリスボンに滞在し、この朝高台のサン・ジョルジュ城へ散歩に出掛けた。王都の象徴とも言うべきこの城砦は、古代ローマによって築かれ、ながくイスラム勢力に占領されたのち、ポルトガル建国の王アフォンソ一世によって奪還された。一二五五年リスボンへの遷都に伴ってここに王宮が定められ、のちにインドから帰還したヴァスコダ・ガマも迎え入れる。この城郭もリビエラ王宮の造営後は等閑たおろにされ、老朽化も目立ったが、展望の良さもあって当地有数の名所とされていた。バイシャ地区から大西洋にまでと拡がる壮大な眺望を楽しもうと、城砦の展望台へ展望へ近づいたとき、突然全身に衝撃を受ける。「私の思いは疾走する馬車の轟音に中断されました。」と彼は故郷の友人への書簡に誌している。「そこらでいまだ聞かなかったような轟音ですが、多少の震動を伴うので、きっと馬車数台だと判断したのです。しかし、すぐさま思い違いに気づき、極度の戦慄に包まれます。大地の震動が非常に勢いを増したため、倒れかかる自分を辛うじて保ち、数歩先の旗竿に寄りかかって身を支えました。これに加えて群衆

① Manoel Portal, *Historia da ruina da cidade de Lisboa*, in F. L. Pereira de Sousa, *O Terremoto do 1.*

Novembro de 1755 e um Estudo Demográfico. Lisbon, 1932. Volume III, pp. 614-615.

激震による重傷で同志に救助されたポルタル神父は、広範な震災状況を委細に記録し、一七五六年末に著述を上梓した。この地震史料は久しく稀覯本とされるが、膨大な叙述の大半はソーサ著『一七五五年十一月一日ポルトガル地震―人口学的研究』に採録される。ただし、ソーサの著作自体も現在は入手困難である。

の驚倒が私を動揺させ、脇を駆け抜ける男の悲鳴も、ポルトガル語の叫びであるものの、怯えた表情からはつきり理解でき、まさしく不測の事態を認識させました。そして、いま眺めたばかりの城郭の上部、荒れ果てた建造物が崩れ始め、周囲の家々もそれと運命を共にし、言語に絶する光景が現出したのです。次第に震動は弱まったので、最悪のときは過ぎたと思ひ始め、座り込んだ人々も身を起しました。しかし、彼らが立ち上がるや否や、勢いを増して震動が再発し、必然的な破壊に万物を突き落すかのようでした。このとき私が目撃した怖るべき混沌たる光景は、いかなる言葉によってもお伝えできません。もしも後世に伝えるとすれば、それほどの出来事を目撃したとしか言えないのです。それまで輝いていた太陽は建物の倒壊から発する砂塵に隠されました。ほとんど暗闇に覆われた私の居所は、荒墟と化した首都の真中にあり、神の慈悲を哀願する人々の叫びに満されています。そして、大地の激動によっていまにも呑み込まれるかと怯えます。いまだ記述されず、想像すらできない極限に私は陥ったのです。」①

【第四七九項】 こうした怖るべき騒擾のなかで愛だけが減りなかった。父母は子から引き離され、子は生みの親を見失う。恋人たちはたがいに探し求めた。なにびとも財貨を支えにできず、懸命に生き残ろうと、魂の救済だけを願った。

① Richard Goddard, Letter to his Friend dated 18 November 1755. British Library Manuscripts Add. 69847.

【第四八〇項】 多くの死者を調べたが、禍因はさまざまであった。ある人たちは壊れる危険のない家屋から去ったり、他家の障壁の下に生き埋めとなった。ほかの人たちは目を天に向け、跪拝したまま建物の石材のため絶命した。こなたでは救助された母親が死せる子を抱き、こなたでは息絶えた母親に抱かれる子が救助された。落下する石から子どもを両腕で護った人もある。カルメル会修道士と思われる人物が、進退極まる高窓に残され、遠方にいる聖職者に救免を願って、火焰で焼かれるまで律儀に待機した。これこそ神が下された畏怖すべき審判の顛末である。

【第四八一項】 障壁の大きな残骸の下で煉瓦を集め、坑道を造って脱出した修道女もいる。身に帯びた衣服が瓦礫に絡まり、身ひとつで抜け出したひともある。奇蹟的なまでに機敏な対応である。寝たきりの患者や瓦礫による重傷者でも、いかに多くの人たちが医者も医薬もなしに幾日で氣力を取り戻したところか。これらこそ神慮による奇蹟にはかなならぬ。①

港湾都市リスボンはいふたつの地帯、三つの地区に大別される。第一は港湾から太い带状に北東へ貫通する低地帯、いわゆるバイシャ地区であり、第二はその両脇に広がる高地帯、すなわち西側のアルト・バイロと東側のアルファマ地区である。ダヴィソンによれば、とくに深刻な被害を受けたは、河岸に近いバイシャ地区であり、地質的には第三期地層に建設されていた。丘陵と溪谷から成る高地帯は第二期石灰岩を基盤とし、地震の

① Moreira de Mendonça, *op. cit.*, p. 116.

被害もやや軽度とされる。いずれも道路の多くは狭い坂道であり、住宅も大抵は四階建てか五階建てに造られていた。^①

『都市リスボン細叙』には王都の人口とバイシャ地区の様子が以下のとおり誌されている。「河岸近くの道路は平坦な石畳であって、広さも申分ない。だが、泥濘を除くため、三日毎か四日毎にしか清掃しないので、かなり不潔である。」そうした河岸から王宮広場にかけては商業の中心地であり、民衆の生活の場でもあった。「主たる精肉店は王宮広場にあつて、その広さや清潔さとともに治安の良さでも際立つ。」内部の仕切りはすべて陶製のタイルで造られ、大量の食肉が六フイート以上の高さに積まれている。「中央の計量器の脇に監視の席がある。つねに彼はそこにおいて、秩序を護り、誤魔化しを即座に糺す。」精肉店街からやや先に進むと、魚屋が連なる大きな広場に出る。「世界でもっとも豊富な魚市場である。ここでは夥しい量の魚が求め易い価格で供されるので、当地の住民は普通の日でも、とりわけ夕食に喜んで肉を断つ。」テージョ河からは活きの良いイワシを無数に捕獲でき、塩漬で山地に送る人も多い。「これら大量の鮮魚を二百艘から三百艘のカラベル船で日々漁場から魚河岸へ輸送するのである。」^②

古代ローマの哲学者セネカは南イタリアの被災に心を痛めながら、地震に襲われた民衆の艱苦を『自然研究』のなかで語っている。「この世が揺れ動き、もっとも堅固な地盤が震動するならば、またあらゆる建造物を支え

^① Davison, *op. cit.*, p. 1.

^② *Description de la ville de Lisbonne*, pp. 8, 39-42.

る確固たる基盤が波動し、不動という大地の本質が消え失せるならば、いづこへ安全に避難できるだろうか。どんな極限に我らの恐怖が達するだろうか。住居の深奥が脅威の源であり、足元に危険が横たわるとすれば、動揺する人々ほどのように逃れ、どこへ身を置くのか。屋根が揺らぎ、建物が倒壊して、すべてが錯乱状態となる。だれもが狼狽して駆け出し、自宅を打ち棄てて、野外に避難する。だが、地球自体の壊滅も憂慮されるとき、まや我らを護り支える地面、我らの街々の基盤である大地、宇宙の基底をなすこの天体に亀裂と動揺が生じるとき、どこへ脱出し、安全な地を求めめるのか。恐怖が憑きまじるとき、どんな支援や慰藉が役に立とう。」嵐や疫病は防禦が可能であり、他からの侵略も城壁によって阻止できる。「しかし、地震という災厄は必然的に広汎な被害を惹き起し、万人を悲惨に陥れて、止まるところを知らない。住居や家族や都市を襲うだけでなく、諸国民や諸地域の全体を破壊するのである。あるいは瓦礫で埋め尽し、あるいは深淵に沈めて、かつて存在したものの痕跡すら遺さない。名高い都の跡にも大地が拡がるのみで、ありし日を偲ぶいかなる遺蹟もないのである。」^① 古来の地震理論を扱った『世界地震通史ーリスボン大地震』のいわば第三部でセネカの『自然研究』は再三論究されており、モレイラ・デ・メンドンサはこの書物を熟読したと思われる。^② 民衆の艱苦に対する

^① Lucius Annaeus Seneca, *Naturalium Quaestionum*, avec la traduction par M. Alasson de Grandisagne. in Sénèque, *Oeuvres complètes*, Paris, 1833. Tome VIII, pp.362-365.

(参照) セネカ「自然研究」『セネカ哲学全集』岩波書店、二〇〇六年。第四巻、七七八頁。

^② Moreira de Mendonça, *op. cit.*, pp. 169, 172-174.

洞察において両者は相通じるが、リスボン大地震についての記録は一層具体的に痛切である。「世界地震通史」のなかで著者自身の被災に関する文言は僅少であるが、彼が終始民衆と艱苦を共にしたことは、同書の傑出した描写から推察できる。

ポルトガルの文学史家エレノス・カルヴァアルハオ・ブエスキュは「『世界地震通史』をリスボン地震を描出したもつとも詳細な記録のひとつ」と評価し、優れた歴史的証言の要件、すなわち「視覚的要素の伝達」と「細部、事例、秘話」の挿入がこれらの史料に備わると分析した。「あまりにも多くを見たときには、語りは途絶え、言葉も見出せない。」このように述べてブエスキュは、『世界地震通史』の第四七九項等を引用しながら、つぎのように評価する。「現代のような視聴覚機器を到底使えぬ時代には、〈眼前に彷彿とさせる〉という古来の修辞法が、大惨事を報告する秘法であった。二〇〇四年の十二月三一日津波によるアジアの大惨事が、映像、写真、ビデオ、映画、絵図等での特集に組まれ、速報として過度に提供されたことを思い出してほしい。」①

【第四八二項】 家屋を喪失した人たちが多数テージョ河畔へのがれ、震えながら荒墟を仰いでいた。突如そこへ怒濤のように海嘯が押し寄せ、リスボンのみならず、八キロ離れたリオ河口の都市まで被害を及

① Helena Carvalho Buescu, *Narration and catastrophe : the 1755 earthquake of Lisbon*.

in Helena Carvalho Buescu and Goncalo Cordeiro (eds).

O Grande Terramoto de Lisboa : Ficar Diferente. Lisboa, 2005. pp. 96-98, 102-103.

ぼした。海流は従来の限界を超えて多数の建物を水没させ、サン・パウロ地区に氾濫したのである。どの水辺でも海嘯は激しさを増し、新たな危険が王都と近郊に拡がって、全土が海に吞まれるとの噂が飛び交った。①

『都市リスボン細叙』ではユリウスの都の景観とともに、小さな地震の発生や沿岸部の危険も指摘されていた。「船上から見詰めると、壮麗な円形劇場を思わせるようにやがてリスボンが浮き出て、その高さや広さによりあたかも天然の一大墓地の如く、稀有な絶景を現出させる。王都の正面にテージョ河が三里もの幅広い港を築き、つねに無数の船舶を呼び寄せている。しかし、ときには激しい嵐の際に南東の風に曝され、たとえば一七二四年十一月あらゆる種類の船舶一八〇艘が乗り上げたり、沈没した。」②

地震の衝撃に較べて、津波の猛威を伝える証言は少数であるが、リスボン中心街に住むあるイギリス人貿易商は、王宮一帯の氾濫についてつぎのように記録する。「王宮広場へ辿り着いてまもなく、水辺から駆け来る群衆怒号が聞えました。〈津波が押し寄せ、都が水没する！〉新たな危険が避難民を戦慄させ、悲鳴を挙げて市街へへと走ります。そこではまたも余震が炸裂し、倒壊する建物の下に多数が埋もれました。」潮流は二十フィートの高さにまで隆起し、一分毎に下降した。「津波の襲来は午前十一時頃と思います。痛苦と絶望の有様でほぼ

① Moreira de Mendonça, *op. cit.*, pp. 116-117.

② *Description de la ville de Lisbonne*, pp. 5-8, 34.

十二時まで動かずにいきました。しかし、焦燥と不安が強まり、近くの魚市場へ移動します。そこでは自宅の倒壊で絶望に瀕する家族と出会いました。しばらく彼らと同席します。そこはリスボンの市門に近く、多くの知り合いが続々と市外へと急ぐのが判りました。(一緒に行く)。周囲の人たちにこう勧めても、領きません。別れをつけて、立ち去る私を背後から呼び止めました。意を決したと言い、彼らも同行したのです。」①

こうした津波についてダヴィンソン著『大地震』には委細な考証がしめされる。「海流は最初引き潮をなし、砂洲が平素より広く露呈した。そのあと猛然たる怒濤となって、半マイル以上内陸部へ暮進し、王都低地帯の街路や庭園に浸入したのである。橋は破壊され、壁も転覆し、巨大な堆積が流されたり、押し上げられた。カスカエス、ストーヴアル、アルガルヴでは多数の人々が没われ、溺死する。」大きな船舶も錨綱を切られ、横倒しとなる。「こうした上げ潮と引き潮が一六フィートほどの高さで三度繰り返し、午後二時頃正常に戻った。」

リスボンの表玄関にあたる王宮河港、壮麗な大理石のベドラ埠頭が陥没し、そこに避難する数百人が消失した。この大惨事についてダヴィンソンはつぎのように説明する。「今次の災害でもっとも面妖なひとつは、新造の巨大な埠頭の沈没である。その埠頭は税関事務所の近くのデブレラ洲にあり、大理石を素材とし、きわめて頑丈なのである。ある船長の確かな証言によれば、そこから二百ヤードか三百ヤード離れて停泊していると、第二の震動とともに水面が突然二〇フィートほど隆起し、すぐに鎮まった。その瞬間埠頭が沈下し、最初の地震

① Anonyme, *An Account of the late dreadful earthquake and Fire which destroyed the City Lisbon*,

London, 1756, pp.12-13.

でそこへ避難した人々が、すべて、近くの小舟や客船もろとも全員沈んだ。いかなる遺体も遺品も浮かばないのである。数日後ブラドックはその場を点検したが、埠頭の跡がなら見出せなかった。のちのち一八四一年にライエルの報告がなされ、三〇フィート以上の深さなどテージョ河のどこにもないと言う。長年の間に地盤が変化したこともありうるが、埠頭の沈没について彼の説明がもっとも妥当と思われる。すなわち、テージョの河底で狭い亀裂が開き、建造物と船舶を呑み込んで、再度閉じたのであろう、と。」①

第二節 住民の艱苦と相互の扶助

一 『世界地震通史』第四八五項から第五〇七項まで

神の怒りと審判、民衆の畏怖と祈祷、火災の発生、犯罪の頻発、国王一家の避難、
『ヨハネ黙示録』の警告、王宮広場の凄惨、王侯貴族による救護、造幣局の防禦、聖職者の献身

① Davison, *op. cit.*, pp. 12, 20.

先駆的な比較研究、ダヴィンソン著『大地震』では美濃・尾張地震、三陸地震、丹後地震、伊豆地震が各々一章を占め、津波の規模に関する記述も含まれるが、部分的にはやや不正確と評される。

リスボン大地震においてとくに顕著な精神状況は宗教的な苦悶と哀願である。古来キリスト教ではさまざまな災厄が神の御業であり、人類への警鐘と説かれていた。こうした災厄には地震、洪水、旱魃などの天変地異だけでなく、疫病、大火、戦争も含まれる。『マタイ伝』第二七節によれば、イエスが処刑された瞬間、天の怒りによって大地が揺れ、巖が裂けた。こうした神の審判をもっとも熾烈に予言するのは、『ヨハネの黙示録』である。靈感を受けたヨハネの幻想では、栄華を極め、奢侈と淫靡いんぴに染まる大都を転覆するため、神は三次にわたり各々七度神は災厄を喚び起す。封印を標識とする第一次では戦争、飢饉、疫病に続いて、さらに「大いなる怒りの日がくる。聖なる小羊が第六の封印を切るや、激しい地震が発生し、太陽は服喪の袋地のように暗くなった。」月全面が赤く変色し、きら星も地に墜ちる。「地上のあらゆる君主、支配者も指揮官も、富者も権勢家も、奴隸や平民を含むすべての住民が、山岳の洞窟や岩間に身を隠した。」また、喇叭の音が響く第二次第七回には「突然大地が激しく揺れ、大いなる都の十分の一が壊滅し、七千人が死亡した。そして、第三次の第七日には怒れる神の最後の審判が下る。「第七の天使が鉢の水を空に放つと、聖なる場から大声が響いた。へこれ終わる！」そのとき稲妻と声と雷鳴が発し、人類が地上に出現して以来、かつてない大地震が襲いかかった。大いなる都は三つに割られ、世界の諸都市も倒壊する。神は大いなるバビロンを想起され、懲罰として杯に溢れるブドウ酒をここに注がれた。かくしてすべての島は消散、すべての山も消滅した。」①

① *La Bible de Jerusalem*, Paris, 1973, pp. 1455, 1788, 1791, 1795.

The New Jerusalem Bible, New York, 1999, pp.1143, 1383, 1397, 1400.

こうした教義のもとで地震への恐怖が敬虔な民族のなかに醸成される様子を、『リスボン地震』の著者ケンドリックはつぎのように述べている。「キリストはポルトガルの邪悪、とくにリスボンの罪悪について激怒され、ルリサルに住む修道女マリア・ヨアンアの夢幻に現れて、忘恩の民に近々天罰をくだすと告げた。この聖なる女性は一七五五年三月に歿するが、夢幻で示された警告はかない知れ渡っていた。」その後も改悛の情なく人々は罪を重ね、神の裁きは一層厳しさを増していく。「別の修道女はイエスから五たび啓示を受け、聴罪師に災厄の切迫を訴えた。処世の仕方を改めるよう人々に促し、怖ろしい運命を免れるべく祈祷を行うことを求めたのである。」しかし、修道女の預言は無視され、そのまま同年秋の万聖節を迎えたと言う。②

【第四八三項】 度重なる危険に動揺した人々は、狂気のように絶え間なく叫びながら、田野を動きまわった。画像を手にして、祈祷を唱えようと、多くの者が見做って震える声を張り上げる。他の者は黙り込み、放心したように歩いた。

【第四八四項】 修行の場である僧院の魔域を修道女たちは畏れつつ離れ、救けてくれる縁者や避難できる田野を個々に捜した。引き裂かれたキリスト教徒の妻たちが、泣き叫びながらそれぞれに田野をさまよう光景は、もっとも哀切な事象であった。若干の人々は破壊を免れた修道院の鐘楼に避難し、神の慈悲を待ち望んだ。

【第四八五項】 最初の地震のあとすぐにルリサル・マルケズ宮殿、サン・ドミンゴ教会、城砦福祉施設などから火の手が昇り始め、建物の灼熱と火焔が材木に移った。かくして災厄は倍加し、惨事が一層深刻となった。血に塗れた人も虚弱な人も多くは荒墟から逃れたが、重病で寝たきりの患者は、そのように脱出できなかった。瓦礫によってあまたの生きものも四肢を砕かれたり、板挟みとなり、逃れようと喧噪に鳴き続ける。これらはすべて火災による犠牲であった。語りえないほど凄惨なのである！

【第四八六項】 震動は数時間毎に繰り返し、激しきは減じたものの、同じような脅威を感じさせた。そして、かくも激烈な地震によって大地が割れるのではないかと人々は恐れた。城砦へ火の手が迫るや、そこに蔽される火薬に引火して、王都周辺を危機に曝し、地震を免れた人をも焼死させるとの流言が飛び交った。怯えた心では理性的に思考できず、連夜のように震えた呼吸と慌てた歩調で王都から一レゴアス、二レゴアス、三レゴアス離れた地点へと歩いた。

【第四八七項】 こうした流言は幾人かの悪者に煽せられる。彼らは豪華な邸宅で掠奪できるよう、塵都に化することを企てた。彼らの強欲から広汎な衰弊が惹き起された。なぜなら、若干の地域では火災を阻止できたのに、地震を免れたものさえすべて見棄てたからである。富裕な王都で大半の住民は、邸宅が焼け崩れても、命だけは護ろうと考えた。

【第四八八項】 沢山の修道女と聖職者が荒墟のなかを巡回し、ときには礼拝の式服ですべての死せる者生きる者の赦免を行い、神と聖母の慈悲を哀願した。他の地域では罪人が悔悛と贖罪に導かれる。多くの一般人も教えを説いた。婦人や田舎者さえ説教師に変身したのである。だれもが神の怒りを怖れ、王都とわが命の最終的な破局に怯えた。神への畏敬を説く様々な言葉も無益ではなかった。なぜなら、多くの罪を省みて、素直な心には涙が溢れたからである。新たな震動と火災のなかで悔悛の情が各人に俗事を忘れさせた。断罪の恐怖で体は震え、神の慈愛を求めて心は燃え、繰り返し溢れる涙で息も窒まるようである。再会した人たちは会釈してたがいに赦しを求め、それまでの対立と憎悪を解いた。こうした態度を採らず、いわば憂き世の災難としか思わぬ者もいる。多くの異端者が己の迷妄を恥じらい、恩寵のもとで新たに生まれた。①

大地震に襲われたリスボンではまもなく火災が発生し、北東の強風に煽られて低地帯の全域と高地帯の過半へと拡がった。サン・ジョウルジュ城の火薬庫へ引火すると、の流言も飛び交う。こうして民衆は地震、津波、火災と三重の災厄に打ち砕かれ、さらにいわば第四の災厄、治安の紊乱に曝される。火災の詳細を語るまえに、『世界地震通史―リスボン大地震』の著者は奈落に突き落された彼らの惨状と苦悶をまず記録する。

「聖母マリアや諸聖人の像を」とケンドリックも補足する。「民衆はいかなる際にも手離さず、地震のとき彼らの多くは民衆の多くはそれを握りしめて街路へ逃げた。しかし、そうした貴重な家宝が地震と火災によって当然破損した。個人の祈祷堂に祀る聖像にもポルトガル人は教会に置かれた名高い奇蹟像に劣らぬ信仰を抱き、

① *Moreira de Mendonça, op.cit., pp.117-119.*

距離の単位レグアは国と時代によって異なるが、この場合一レグアは約四・二キロと考えられる。

そうした家庭の守護神と多多少も親密で内面的な関係にあった。」壮麗な教会が倒壊したことに較べれば、そうした聖像の破損は勿論些事である。しかし、「本来敬虔な国民の宗教的な不安と混迷がそれによって倍加され、地震発生を超自然的な意義を一層深刻に意識させた。最初の衝撃が止み、多少考える時間が戻ると、罪深いリスボンが神に罰せられ、救われる方途もないと、哀れな国民はいつまでも痛切に感じた。」多くの聖職者が彼らの悔悟と恭順を求めたことは言うまでもない。「その後数ヶ月も民衆は度重なる余震に怯えたり、説教や冊子に接するたびに、己の邪悪さと王都への審判をつねに思い知るのである。」①

【第四八九項】 国王陛下とご一家はベレンの離宮にいて被災を免れて田園へ避難され、そこに建設された立派な仮設御所で数ヶ月生活された。(マヌエル親王だけはネセシタラス宮殿に住んでおられた。)こうして造られた広大なアジユタ宮は、壮大で完璧で木造とは思えないほどである。これら高貴な方々の安否を気遣う人々は、国王ご一家が危機から脱したのを知って、みな喜びに耐えず、リスボン艱苦の当日その喜悅を愛する者や信頼する者と分ち合った。②

一七五五年当地では遷都五百年の祝賀が華やかに挙行されていた。「新年と公現節の式典には」と『神の怒り

① Kendrick, *op.cit.*, pp.120-122.

② Moreira de Mendonça, *op.cit.*, pp.119-120.

一七五五年リスボン大地震』の著者エドワード・バイスは書く。これを祝福して「各国使節、貴族、行政者、聖職者が参列して、国王の手に接吻した。」イスラム勢力からの失地回復を完了したアフォンソ三世が、一二五五年コインブラから王都をこの地に移したのである。その後インド航路を開発し、絶対王政を確立したマヌエル一世がテージョ河畔に壮大なリベイラ王宮を創建した。さらに十七世紀前半専制君主ジョアン五世はそれを大規模に改造し、バロック様式の教会も構築した。一七五〇年にジョアン五世は逝去し、新たに即位したジョゼ一世はスペイン国王の息女マリア・アンナ・ヴィクトリアを王妃としていた。遷都五〇〇年の記念事業についてバイスはさらに続ける。「リベイラ王宮に付設された壮麗な新歌劇場が三月の末、王妃の誕生日に開幕し、宮廷の熱狂は著しく高まった。イタリヤの建築家ジョバンニ・カルロ・ビビエナの設計によって奥行七〇ヤード、横幅三五ヤードに造営された。」①

大地震のとき国王はベレン離宮にいて、家族とともに遭難を免れた。ベレンは王都から西へ約六キロに位置し、その河港は大航海時代の主要な重要な発進地であった。しかし、王都における祭日の盛儀には国王の臨席が恒例とされるのに、万聖節の午前郊外にいたことには疑問が生じる。ほとんどの文献は『世界地震通史』リスボン大地震』の記述を超えていないが、マリアナ王妃の書簡をも検討したニコラス・シュラデイの著書『最後の日』一七五五年リスボン大地震における怒り、破壊、理性』ではつぎのように説明されている。「万聖節の日国王は暁に目覚めた。ジョゼ一世、王妃マリアナ・ヴィクトリアは四人の王女を伴って早朝リベイラ王宮王室

① Patec, *op.cit.*, pp.47-48.

教会のミサに列し、すべての聖者、とくにポルトガルを守護する聖ジョルジュに然るべき祈りを捧げた。」祭日の残りを国王も王女も田園で過ごすよう希望し、四キロ離れたベルム離宮へ王冠馬車を走らせる。あとには聖職者や宮廷人が続き、沿道の群衆から歓呼を受ける。「その一行がベルムの離宮に着くや否や、それぞれ居室に入る国王と王妃を最初の震動が襲った。王女たちは礼拝堂に、廷臣、従者、聖職者、侍女も離宮のどこかにいた。王族、貴族、僧侶、平民のだれもが這い回り、庭園の空地へ逃れた。」①

【第四九〇項】 最初の夜から悲痛な叫び、絶えざる衝撃、続発する地震へ恐怖、かつまた王都のほとんど全域を襲う火災が、すべての人々の艱苦を倍加させ、財産の欠如と両親の配慮の喪失を痛感させた。大半の家族が引き離され、頼るすべもなく泣き続ける。かくも多くの苦難に耐えうる人だけが、神意により救われると思われた。

【第四九一項】 火焔は家々を焼き続け、地震も衰えを示さない間に、罪深い盗賊は神をも災をも怖れず、侵入した邸宅で金銭、宝石、衣類を掠奪した。地震でも家が崩れず、火災の被害も受けぬ多くの家族が、盗難によって文無しになる。これらの多くはガレー船を科せられた罪人や牢獄から脱走した囚人に帰せられる。

① Nicolas Shradv, *The Last Day, Wrath, Ruin, and reason in the great Lisbon Earthquake of 1755*, USA, 2008, pp.20-21.

【第四九二項】 火災の連続と地震の続発によっても私たちは祖国と国土への愛を忘れなかった。神は罪人の赦免を望まれ、魂の救済のため大地を示された。王国のあらゆる都市、町村、地域にいる近親や友人を求めて、その土曜日多くの人々が歩き続けた。以後幾日も悩める旅人が街道に溢れる。近郊の野に留まる人々は、豪華な寺院、壮麗な宮殿、神聖な殿堂、さらには宝石、調度、衣装など多くの富が炎上するのをときには目のあたりにした。①

オラトリオ会の聖職者アントニオ・ペレイラ・デ・フィゲイレドが執筆した『リスボンの地震と火災の物語』は、信頼できる記録としてモレイラ・デ・メンドンサが依拠した文献のひとつである。倒壊した牢獄から多数の囚人が脱走したとの情報も、被災者の恐怖を募らせた。「沢山の沢山の盗賊や悪党が」とフィゲイレドは叙述する。「市中に横行し、どの家でも盗難の危険があり、どの教会でも聖物盗みの恐れがある。なかには残忍で貪欲な輩もいて、遺体すら見逃さず、男性から刀剣、時計、締め金を、女性から扇子、指輪、宝石をそこから剥ぎ取った。」宰相ポンバルの主導で開始された緊急措置は、こうした悪行の取締りを重要な課題のひとつとしていた。こうした犯罪者を峻厳に処分する勅令が遅滞なく国王から発せられ、「その結果数日のうちに三四名が絞首刑に処せられる。内訳はポルトガル人十一名、スペイン人十名、アイルランド人五名、サヴォワ人三名、

フランス人一名、ポーランド人一名、フランドール人一名、ムーア人一名であった。」①

また、イギリス人貿易商のひとりとは壮絶な摘発劇について証言を遺す。「地震がまだ終わらないうちに、無人となった家々を恥知らずの悪漢の一味が掠奪し始めました。自宅の建物が頭上に墜落することを、住民は懸念して留守にしたのです。掠奪者を逮捕するよう、また抵抗する際に射殺するよう、警吏へ急遽命令が発せられました。盗賊を捕えるため、幾人かの警吏がある邸宅へ踏み込むところを、偶々私は通りかかります。一味は邸宅から可能な限り奪い取った彼らが、警吏の接近に気づきました。ひとりの盗賊が部屋の窓際でらっば銃を示し、なかに入る者はただちに殺すと怒鳴ります。(俺たち十人はみな命知らずだ、)と彼は喚くのです。(自分可愛ければ、立ち去るがよい。)これを警吏らは策略と解したのか、脅迫にすこしも臆せず、邸内へ突進しました。しかし、頑強に抵抗した彼は、ひとりしか立ち向えない狭間に身を寄せて、一名の警吏を殺し、他の一名にも胸元に重傷を与えます。それでも第三の警吏に銃を取り上げられ、即座に逮捕されました。彼は牢獄へ護送され、翌日死刑を執行されたのです。」②

① Antonio Pereira de Figueiredo, *A narrative of the earthquake and fire of Lisbon by Antonio Pereira, of the Congregation of the Oratory, an eye-witness thereof. Illustrated with notes. Translated from the Latin.* London, 1756. pp.18-19.

② A particular Account of the Late, Dreadful Earthquake at Lisbon. in Shrawdy. *op.cit.*, pp.33-34.

【第四九三項】私はこれらの災害の目撃者である。自宅で最初の震動に襲われ、眼前で庭も崩れたが、神の慈悲で自分は救われると感じた。家族すべてに傷害はなく、被害を免れた自宅にしばらくいた。サンタ・バルバラの野へ行くと、主キリストの慈悲と聖母マリアの加護への祈りが続けられ、私は深く感動したが、祈祷に没入できなかつた。数千人が暮らし、数名の神父も住む地域を、城郭炎上の恐怖が無人にしたのである。そこには市参事会の資料保管室もあって、自由都市に関する重要文書一万六百件があり、それらを保管するのが私の大切な職務であった。危急の際そうした書類を防備するため、建物の門口を離れてはならなかつた。少数の人たちの協力を得て、そこで最初の数日を過したが、惨禍と脅威しか見えず、悲鳴と号泣しか聞えなかつた。①

【第四九四項】敬虔な家族や寄り合う民衆が毎日祈祷を続け、聖像ベンハ・フランサの前で聖母マリアの加護を祈った。ほとんどが半裸であつて、みな平伏したままである。近親の安否の知れぬ人は、声よりも涙しか出ない。被害や生死や災厄について尋ねることなどできなかつた。揺り出された生きものは色も形もなく、すべてが悲痛であり、悲惨である。太陽の光が消え、ときに物寂しい夜がいまやきわめて怖ろしく感じられる。なぜなら、喜悅と時刻と調和を告げる鐘が消失し、一切が不気味な沈黙に包まれ、怯える生きものも声すら発しないからである。

【第四九五項】なによりも神への愛と隣人への博愛が人々の心に溢れた。敵同士が抱擁し、たがいに

救しを求めた。友人や知己が生きているのを知り、たがいに祝福した。肉親や財産をなくした人も親身に慰め合う。徳高く誉むべき行為であるが、ながくは持続しない。①

民衆の艱苦についてモレイラ・デ・メンドンサの記述はさらに続くが、この書物において唯一ここでのみ、当日の自己の動静に關して一言触れられる。自宅の倒壊を免れたモレイラは、なによりも重要文書の保全のためサン・ジョルジェ城へ駆けつけた。当時市参事館は城砦のなかにあり、平素文書の集積と管理を担当する彼が、勤務先で被害の惨状と民衆の苦悶を目のあたりにしたわけである。

旧約聖書には神が栄華の都バビロンを滅ぼしたと誌されているが、『ヨハネの黙示録』における大いなる都とはキリスト教徒を迫害した暗にローマを意味したとされる。ちなみにエホバを祀る神の都エルサレムは山岳部にあり、他方栄華を極めた背徳の都ソドム、バビロン、ローマは、リスボンと同じくいずれも沿海部の低地

① *Moreira de Mendonça, op. cit., pp.121-122.*

に位置し、国際的な商業都市として繁栄した。① ヨハネの啓示そのままにリスボンでは大地が揺れ、真昼に暗闇となり、地底から轟音は発した。最後の審判が下されて、怒濤が押し寄せ、殷富な王都が壊滅したのである。

高台に築かれた城砦へは周辺の住民が地震の直後から蟬集し、津波に襲われた河岸の人々も続々と避難した。展望台で最初の震動に襲われたイギリス人ゴダールは低地帯の大規模な破壊を見詰め、なお高台に留まる決意をする。「自分の居所がどこよりも安全であるにもかかわらず」と友人宛書簡で彼はさらに続ける。「目の前で転回される陰鬱な光景を見詰め、実際に落ち着けませんでした。豪壮な建造物で持ち堪えたのもあるようですが、家屋、教会、僧院、宮殿が瓦礫の黒山を築いています。他方天の復讐を免れるよう民衆は必死に哀願するのです。こうした状況にあつて彼らの信仰の真摯さは疑うべくもありませんが、そこに溢れる偶像崇拜と迷

① 矢内原忠雄「黙示録」『矢内原忠雄全集』第九卷、岩波書店、一九六三年。四七三、五三〇―五三二、

五三六頁。

太平洋戦争の最中に青年たちの集会で『ヨハネ黙示録』の講義を続けた矢内原は、「ベルリンの焼かれ、若しくは東京の焼かれた日黙示録第一八章の記事をその事実の中に読み取ることもできよう」と戦後に書いた。「原予爆弾の一投によって、強大な近代都市も一瞬にして潰滅する。」戦後の世界はこの警告に耳を傾けず、依然その所業を悔い改めないことを彼は憂慮する。「第二の禍害は過ぎ去つても、なお第三の禍害が不可避にらざるをえないのである。」

信の大きいなる混合に正直のところ嘔然としました。救われるか否かを完全に決める護符のように、十字架像や聖者の肖像を持ち歩き、熱烈に恭しくそれらに接吻するのです。そうした場で聖職者はきわめて活動的であり、群衆の祈禱を主宰し、赦免をも授けます。彼らの迷妄になんらの敬意も感じないので、そうした営みの埒外にできるだけ留まることが必要でした。」①

【第四九六項】 埋葬されない遺体が寺院や街路、さらには建物の残骸のなかに横わっていた。極度の苦悶を続ける重傷者は、生き延びるよりも死を願った。比較的軽度で生き残れる負傷者も、荒墟において救援を得られず、多数死亡した。死者を葬るため迅速に行動するよう、枢機卿総大司教祝下は聖職者と教区司祭に指示された。同じ配慮を国王陛下も示され、人々を適切に導くため国王軍の將校を重要な職務に任命された。聖職者ではないが、こうした活動に幾人かが献身的に従事した。ラフオエス公爵の弟、ジョアン・デ・バルガンサの深い徳業は傑出しており、倒壊した建物の危険を冒して日々働き、あまたの生物を救ったり、多数の遺体を埋葬した。サンバヨー殿も怖ろしい危険をも顧みず、幾人かと協力し、数週間同じような作業を続けた。二四〇の遺体が墓に葬られ、多くの生命が荒墟から救出された。治療のため病院へ運ばれた者もある。天の特別な恩寵によって荒墟で生き残った人のなかには、四日後にペンハ教会で救出されたひとりの男性、七日後にサンタ・マリア大寺院で救出されたもうひとりの男性、そしてカノス

① Goddard, *op.cit.*

街で九日後に救出された少女が含まれる。

【第四九七項】 称賛すべき愛徳をもって若干の貴族は外科医を伴って数日間田野を巡回し、放置された負傷者を治療した。王立誠信病院の指示によってサン・ベント修道院とサン・ロケ修道院に圜地が設けられ、無数の負傷者をそこへ運んで、多くを治療した。彼らの大半は腕や脚を切断し、多数の負傷者が傷口からの壊疽で死亡した。

【第四九八項】 王都の中核全体が怖るべき沙漠と化し、火災で黒焦げの高層建築の先端以外には、瓦礫の山と灰燼の山、さらにはいつも大きな人波と豊かな財富で溢れた大道の形跡しか見えなない。王都をよく知る人は、どこに踏み入れたか判らず、惨憺たる現実を見て記憶にある形象に困惑する。

【第四九九項】 総大司教祝下はミサの供物を捧げるため、田野に運搬できる祭壇の製作を命じられた。また、万聖節の当日必要なものを持ち運び、サンタ・バルバラ草原でもミサが行われた。

【第五〇〇項】 リスボンの住民は近郊の田野や王都の周辺を放浪した。ここでも神慮の偉大さが明白に感じられた。幾千もの家族が住居も衣服もなく、食物を買う金子も持たず、悪天候から身を護るのに必死であったが、慈愛深く至高なる父に彼らは支えられ、飢餓で絶命する者はなかった。①

一九一七年に出版された『古きポルトガルと若きポルトガル―歴史的研究』には、震災直後の宮廷とボンバ

ル自身の行動が記述されている。「王都における社会構造が物質的に破壊され、精神的にも痛撃されたので、政権をリオデジャネイロに移転することが提起された。こうした事態で秩序と自立が回復されたのは、主としてボンバル個人の力能による。練達した外交官であり、学芸の愛好者である彼は、八日間馬車のなかで生きた。被災者を救護し、暴徒を鎮圧し、社会を再編したのである。」①

「国難に直面したボンバルの果断は卓越しているが、多岐にわたる緊急措置と大規模な再建事業には数限りない協力と支援を必要とした。「こうした状況を救ったのは、」とケンドリックは述べる。「実際にはポルトガル国民であった。なぜなら、一七五五年十一月危機の日々に一国においてもっとも優れた人たちが、果敢に行動し、沈着に義務を果たしたからである。」こうした人々の功績は同時代の文書に多く誌されるものの、今日に至るまで過小評価されている。「その第一はラフォエス公爵ドン・ペドロ・デ・ブラガンサであって、大審院院長として王国の治安を担当した。また第三代マリアルヴァル侯爵ドン・ディオゴ・デ・ノロンハは兵馬総帥として軍規を、アレグレット侯爵フェルナオ・テレス・ダ・シルヴァはリスボン市参事会会頭として経済政策をそれぞれ担当する。さらに首席軍司令官である第二代アブラント侯爵をはじめ、国王軍の高級将校もそうである。リスボン参事会の有能で積極的な構成員も、市民の利益のため油断なく対処し、ときにはポムバルの政策へ反対や批判も表明した。」さらに、「首席技術将校で古文書館担当のマヌエル・デ・マイヤ、上級技術者カルロス・マルデル、さらにユジエニオ・ドス・サントスはリスボン再生への計画と構築で著名であるが、国難の最初かつ

① George Young, *Portugal Old and Young, an Historical Study*, Oxford, 1917. pp. 191.

最悪の日々にも貴重な働きを示した。」①

オランダの週報『ガゼット・デ・ライド』も大地震に関して多くの記事を掲載したが、一七五五年十二月二六日号にはリスボンからの報告として、治安の紊乱と掠奪の阻止が記述されている。「地震の被害を免れた建物も、火災で焼尽したり、混乱に乗じる極悪人の標的となった。あの怖ろしい瞬間に囚人と徒刑囚は鉄鎖を逃れる好機とみなし、すぐさま掠奪や悪事に走ったのである。忌むしくもスペインやフランスの多数の脱走兵、イギリスの幾人かの水兵がこれに合流し、被害が二割も三割も増大した。なおまた、最初の地震の直後七カ所に放火したことを、あるムーア人は処刑の際に認めた。フランスの脱走兵も王宮に隣接するインド商館にやはり放火したと自白したのである。銀塊を蔵する造幣局も同じ運命に曝されたが、ひとりの下級将校の超人的な決意と不屈の武勇によって防禦された。この勇敢な軍人は銃剣と小銃を携え、三日三晩大胆にも部署を護って、周囲をうろつく極悪人を遮断した。こうした壮挙を称えるため、国王はとりあえず彼に大尉に昇進させた。」②

ブラジルで採掘された大量の銀を収蔵した造幣局は、盗賊にとって絶好の標的であった。これを奇蹟的に防禦した将校、バートロメウ・デ・ソウサ・メクシア大佐の姿は、さきに言及した貿易商ブラドックの書簡にも見出される。倒壊した自宅から逃れ、なおまた津波に襲われて、「ついに私は造幣局へ行こうと決意しました。

① Kendrick, *op.cit.*, pp. 77-78.

② *Gazette de Leyde, ou Nouvelles extraordinaires de divers endroits*, 26 décembre 1755.

平屋の頃丈な建物で、河に面した部屋のほかは大した損傷を受けぬと思ったからです。毎日護衛していた軍人の一団がそこからまったく消え、一七歳か一八歳の青年がひとりだけ玄関に立っていました。貴族の息子である彼が部隊長でした。たえず大地の震動があり、二十フィートか三十フィート離れた向側の建物もみな揺れるのを見て、そこは非常に危険と感じました。中庭は水浸しなので、私たちは石材と瓦礫に埋まる室内へ避難します。ここで彼と言葉を交わし、感嘆の意を示しました。同僚の軍人がみな逃げ出したのに、これほど若い身で勇敢にも部署を護っているからです。〈大地が割れようとも、〉と彼は応えました。〈自分を呑み込もうとも、部署を離れることなど思ってもみない。〉この若き貴紳の気概によって式百万の貨幣を蔵した造幣局が掠奪を免れたのです。これほど怖ろしい状況でないときすら、かくも平靜かつ沈着に行動する人物を見たことないとか、彼に報いるすべを知りません。①

【第五〇一項】 慈父の心と王者の勇氣をもって徳高き国王陛下は、広大な田野に留まる幾千人にも必需品を支給するよう命じられた。ベレンへ移された者には、必要に応じかならず医薬が供される。多数の王族や沢山の外国人にも仮設小屋や板塀用の木材が調達された。

【第五〇二項】 この災厄に率先して王族のアントワーン殿下、ジョゼ殿下、ガスバル殿下は、寛仁と高潔な気概をもって対処された。バルハラ宮殿の広大な緑地では、庭園と森に千人以上が収容された。

① Braddock, *op.cit.*, pp. 34-36.

みな充分な食糧を提供され、数ヶ月そこに留まる。彼らの需要を充たすため、沢山の衣服も送られた。こうした親身な厚意と大いなる博愛に対して到るところから讃辭が寄せられる。その名声は世界に伝えられ、諸殿下の徳業が遍く称讃されるに至った。

【第五〇三項】 すべての聖職者は僧院の門戸を開け放ち、幾百もの家族を受け入れた。あらゆる場で多くの博愛が発揮されたが、改革的な聖アウグスチヌス修道参事会員と博学のサン・フィリップ・ネリ信心会員(オラトリオ会士)がとくに際立ち、般らはサン・ヴィセンテ修道院とネセシダス修道院の構内に多数の家族を避難させた。

【第五〇四項】 多くの貴族や個人が博愛という美德を実践し、能うかぎり最大の寛仁をもって邸宅や農園にあまたの民衆を寛大に受け入れた。すべては徳業の機会を授けるといふ神の意向である。主イエスは貪欲な者の多くを氣前のよい慈善家に変身させた。つねに神慮が無限に偉大であることに感嘆する！①

聖職者も民衆に悔悛や贖罪を説くだけでなく、救援活動にも重要な役割を担った。次第に独裁色を強めるポムバル政権のもとで、やがて宗教団体に圧力が加えられ、そうした功績が覆い隠される。また、外国人による証言は当地における異様なまでの祈禱や儀式に眩惑され、ともすれば地道な努力と功績を見逃している。「地震

① Moreira de Mendonça, *op.cit.*, pp.124-125.

の直後ただちに立ち上った聖職者集団が」とケンドリックは論述する。「挙って献身的かつ英雄的に行動した功績を軽視してならない。枢機卿総大司教が真摯に教会を先導されたことは正確に記録され、様々な宗教団体、とりわけオラトリオ会神父、イエズズ会士、ベネディクト会修道士、アウグスチヌス会修道士も目覚ましい働きをした。だが、王都のもっとも罹災した地域で尽くした普通の教区聖職者については称讃が足りない。地震の証言を読む者は、彼らが大きな危険と怖るべき混乱のなかで責務を貫き、果敢かつ献身的に行動したことにだけ少しも感銘をうける。地震や火災で家を失った民衆に彼らは天幕や小屋を用意した。惨事のあと被害を確認する主要な機関となり、教区の生存者、犠牲者、流失者について公式の調査に関与したのである。被災者のために長期にわたり仮小屋で救護を行った事例もある。たとえば、サン・ジュリアの教区司祭は王宮広場へ移動して木造の小室のなかで二年間働き、焼尽したサンタ、マリア・マダレーナの教区聖職者も一時同居した。サンタ・ジュスタ、サンタ・ルフィナ、サン・ニコラウの教区もロシオ広場の仮小屋を本部とし、そこには異端審問所も木造の暫定事務局を置いていた。倒壊したサント・クルス・デ・カステロ教会の教区司祭は教区内に設けた小屋で職務を続け、城砦の丘の南、壊滅したサン・ペドロ教会の教区聖職者はしばらく河畔の倉庫を教会として使用した。」^①

① Kendrick, *op.cit.*, pp.78-79.